

課題研究
PISA型読解力の実態とその育成のための理科学習指導の開発

堀井俊宏
Horii Toshihiro
広島大学大学院

【キーワード】 PISA型読解力、児童の実態、理科学習指導法の開発、活用

I 研究の背景

これからの時代に必要とされる学力の1つとして、PISA型読解力に対する注目が高まっている。4月に実施された「全国学力・学習状況調査」においても、文脈に即した知識の活用場面を想定した問題、換言すれば、PISA型読解力を意識した出題が多く見られた。理科学習においても、森(2006)は、「PISA型読解力を取り入れることによって、理科の授業内容を豊かにし、学習活動を活発にするとともに、高度情報社会に生きる21世紀型学力をも培うことができる」と述べ、PISA型読解力の重要性を指摘している。

このような流れの中で、PISA型読解力を育成するための指導法開発が急務となっている。そのため、文部科学省が作成した指導資料をはじめとしていくつかの実践例が提案されているが、児童の実態を明らかにし、それを踏まえた指導とはなっていないようである。

II 研究の目的

そこで、本研究では、開発したPISA型読解力を測定するテスト問題(堀井・中垣、2006)を活用し児童のPISA型読解力の実態を明らかにし、その実態を踏まえた小学校理科学習指導法を構想することを目的とした。

III 研究の方法

(1) 児童のPISA型読解力の実態把握

開発したPISA型読解力を測定するテスト問題を活用し、以下に示す調査を行った。

- ① 調査目的
PISA型読解力の実態の把握
- ② 対象
広島県の公立小学校2校の第6学年児童
- ③ 調査時期
2006年9月～10月
- ④ 分析視点
小学校段階におけるPISA型読解力の実

態、特に達成が十分でなく課題があるものを明らかにすることをねらいとして分析を行った。

(2) 実態を踏まえた理科学習指導法の構想

調査で明らかになった実態を踏まえ、児童のPISA型読解力を育成するための小学校理科の学習指導を構想した。

IV 結果

(1) PISA型読解力の実態

分析の結果次の3種、①～⑤において課題が顕在化した。

A テキストから情報を取り出す力

① 視点を明確にして、的確に情報を取り出すこと。

B 予想に基づいてテキストを解釈する能力

② 予想に基づいて、考えること。

③ 自分の考えを表現する際、図表を適切に活用すること。

C 実生活において活用する能力

④ 学習したことを他の場面に適用すること。

⑤ 根拠をより科学的、客観的なものとすること。

(2) 実態を踏まえた理科学習指導法の構想

明らかになった実態を踏まえ、以下のようない理科学習指導を構想した。

① 明確な視点での情報の取り出し、問題把握ができる学習活動(導入)

② 科学的な根拠に基づいて判断する学習活動

③ 獲得した知識を活用することができる学習過程

詳細は発表時に報告する。

<主要参考文献>

(1) 堀井俊宏・中垣眞紀(2006)「PISA型読解力を測定するテスト問題の開発」『日本教科教育学会全国大会論文集』pp123-124

(2) 森一夫(2006)「理科の授業－ここを改善したい」『授業研究21』No.602 22-24